

鑑賞ボランティアの体験が教職課程の学生に与える効果

堀出 雅人
京都華頂大学

1. 教員に求められる実践的指導力と京都華頂大学の教職課程での学び

知識基盤社会の到来とグローバル化の進展に伴い、学校教育を通して、新たな知の創出のため既存の知識をつなぎ合わせる柔軟な「思考力」と「判断力」、そして歴史・文化・思想が異なる多様な他者と共生するために合意形成を生み出す「表現力」や「コミュニケーション力」を子どもに育成することが期待されている。それらの力を伸ばす基盤となる言語活動の充実を教員は各教科指導を通して図っていくことが重要となる。

一方、生徒指導上の課題も複雑化・多様化している。子どもたちは、特定の仲間との関係を重視し、「孤独なやつ」とレッテルを貼られることを恐れ嫌う。だから、グループ内で、自分の思いや主張は隠す、メールやチャットにはすぐに返信するなど、仲間外れにされないように細心の注意を払う非常にストレスフルな日々を子どもたちは送っている。グループ内で立場の弱いメンバーを「いじめられキャラ」として、集中的にきつい言葉をかけ笑い者にする場合もある。「いじり」が深刻な「いじめ」被害とつながるケースもみられる。これらの問題を未然に防ぐためにも、教員は子どもたちが本音で語り合える関係性を生むきっかけづくりを仕かけていく必要がある。

教科指導、生徒指導ともに学校現場の今日的な問題に応えるために大学の学部段階の教員養成課程で教員としての実践的指導力をいかに涵養していくかが大きな課題となっている。京都華頂大学においても、正規カリキュラムの更なる充実とともに、それと連携する、学校教育の現場などでの実地教育をはじめ、課外での実践的な学びの開拓を図っている。具体的には、スクールボランティアや教育関連施設へのフィールドワークといったプログラムを現在試行的に実施している。それらの企画を担当する教員の一人として、学校現場で子どもたちの対話を生み出し言語活動を充実させる授業づくりや学級経営を通して子ども同士のつながりを太くし、あるいは新たに増やす時間づくりに関するアイデアを得る機会を探していた。

2. ACOP との出会いと鑑賞者ボランティア参加への声かけ

そんなとき、京都府の府民力推進課・府庁 NPO パートナーシップセンターの協働コーディネーター日高由紀さんから、「ナレッジ×DIY 協働高感度！地域力 UP ワークショップ」の講座として日高さんが進行を務める『『感覚を言語化するワークショップ』～対話型鑑賞（ACOP）を協働に活かす～』の開催案内を受けた。「先生をめざす学生さんにおすすめだから」というお誘いだったので、参加することにした。

この講座のゲスト講師が、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センターの岡崎大輔先生であった。講座では、NPO や行政関係者など、老若男女の参加者と 2 つの作品の対話型鑑賞をおこなった。スクリーンに映し出された作品について、時間をかけて全体的に、次に部分的にと、順を追って見ていく。暗闇と静寂のなか感覚が研ぎ澄まされていき、「作品」と「わたし」との対話のはじまる。わたしの頭の中なかで、作品のストーリーが構成されていく。美術館の展覧会で作品をみてまわるときには気づきもしないであろう「陰」や「染み」や「傷」もわたしに語りかけてくる。

照明が付き、現実の世界に引き戻されたところで、鑑賞者同士での対話が始まる。ひとつの「事実」に対して鑑賞者それぞれの「解釈」がある。当たり前のことだが、実際にそれぞれの語りを聴くことで、日常の慌ただしさのなか、いかに自らの見方だけで物事を整理し判断してしまっているかに気づかされる。多様な解釈が加わるなかで、わたしのストーリーの再構成も進み、ほかの鑑賞者の視点を得ることで自分の脳がどんどん拡張しているような不思議な感覚を味わった。

自らの捉え方・感じ方を広げられる、対話を引き出すためのファシリテートの勉強になるなど、この ACOP の面白さをぜひ学生にも味わってもらいたいと、そのためにはどうすればよいかと岡崎先生に相談に乗っていただき、ACOP の鑑賞者ボランティアを募集していることを教えていただいた。さっそく本学の学生に呼びかけ、教職の道をめざす 2 年生の 3 名の学生からの応募があった。次節では、学生のふりかえりレポートの記述を取り上げて解釈を加えることで、教職課程に在籍する学生は ACOP から何を学ぶことができるのか、その効果を考えることにする。

3. ACOP に参加した学生の感想

参加学生のレポートをもとに、教職課程で学ぶ学生が ACOP を通してなにを考え、なにを得たのかを、①鑑賞前、②鑑賞中、③鑑賞後の意識の変化からまとめる（斜体はレポートの一部抜粋したもの、下線は著者が引いたものである）。

①安心感をもたらすナビゲーションが対話を創る

説明会で特に印象的だったことが作品鑑賞するのに自由に発言しても良いということでした。個展や展示会などに行き作品を観て楽しむことが好きですが、その作品に対して「知ったようなこと」を言っても大丈夫なのかとっていました。鑑賞会では絵の確かな情報が知らされることもなく本当に自由に感じたことを言っているのだと感動しました。「みる・考える・話す・聴く」のサイクルが楽しくなった。（2 年生・A さん）

学校生活を通して「間違い」や「失敗」を恐れる子どもは少なくないだろう。先生のもつ「正解」、あるいはクラスの「空気」を読み違えないように、自らの本音を押し隠す傾向が強いと言われる。こういった子どもの状況や気持ちを把握しつつ、子どもたちが多様な意見を尊重し協調できる対人関係を築くための働きかけが教員には求められると考えられる。そこで重要なことは、発言を思いとどまる子どもへ「教室は安全安心な場である」と伝えることであるだろう。A さんが感銘を受けているように、ACOP では、ナビゲーターの語りかけによって、「自由に発言しても大丈夫」といった安心感を参加者に伝え続けることで、参加者と作品、参加者と参加者のコミュニケーションは「恐いもの」ではなく、多様性に気づき、自分の見方を広げることができる「楽しいもの」だと思うきっかけづくりを得ることができる。このナビゲーターの姿勢から、学生は授業で子どもたちの考えや発言をファシリテーションするための心がけを学ぶことができるだろう。

②「伝え合う」難しさの先にあるもの

自分の中にわき上がった様々な思いや意見、あるいは疑問を、ほかの鑑賞者にきちんと伝え、同時に他者の言葉にもしっかりと耳を傾けることの難しさを感じました。そして、1人では達成できなかった作品の解釈、新たな発見をしました。(2年生・Bさん)

鑑賞の終わりにはもっと違った、考えていたこととは真逆の印象に変化した作品もあり、他の人の意見を聴くことで自分の頭の中で凝り固まっていた考え方が解きほぐれていくようでとても感動しました。(2年生・Cさん)

当初、ほかの参加者間の積極的なやりとりに圧倒されていた3名の学生であったが、ナビゲーターの巧みな進行から、1回目の鑑賞会の後半では挙手できるようになっていった。Bさんがふりかえるように、自らの思いや考えを正確に言葉で他者に伝えること、他者の考えや思いをしっかりと読み解くことの難しさを3名は痛感しながら、当初の印象とは「真逆」の作品解釈に到達するといった驚きに似た感動を重ねていった。「自分から語らないと何も得られない」と、積極的なコミュニケーションの大切さを3名とも意識するようになった。教員は学級担任として35名~40名の子どもたちの成長を見守り指導する立場として、子どもたちの多様性に応じた接し方を求められる。さらに、子ども理解を深めるために子どもの日々心の変化を読み解く高い感受性が必要となる。ひとつの考えや見方に捉われることは、子どもの可能性を閉ざしてしまう危険性もある。したがって、ACOPを通して、子どもの様子や性格に合わせ、教師から積極的に声かけを行う勇気と、物事は見方を変えると捉え方が変化すること、つまり、子ども理解は教員自身の固定化された見方だけで進めていけないことを学べた点は学生にとって大きな収穫であったと考える。

③他者への敬意と異なる価値観への寛容さ

考え方の違いを肯定的に受け取り、物事を多方面からじっくり考えられるようになるうと思いました。普段の会話でも「言いつ放し」や「聴きつ放し」になっている事に気づきました。コミュニケーション力を普段と違った角度から考えられました。(2年生・Bさん)

Bさんのレポートでは、日常的な対人関係への反省の思いが綴られていた。第一印象や思い込みで異なる意見を排除しがちであったが、異なる価値観との出会いから、物事の多面性や深みの面白さにBさんは気づきはじめた。そのために、「言いつ放し」「聴きつ放し」にならないように、お互いにとってより意味深い対話となるように、相手が気持ちのよい伝え方や聴き方ができるように意識しようと、学生たちは考えるようになったと思われる。特に、子どもたちの生活世界の中にもインターネットが浸透してきたことから、対面での気持ちの伝え方にもまだまだ慣れていない子どもが文字のみのネットコミュニケーションを介して仲間との関係を築くなかで、ほんの少しの言葉の行き違いをきっかけに対人関係のトラブルに発展するケースが増えている。学校現場での情報リテラシーや情報モラルの教育活動の推進が進められ、その効果が期待されているが、学級での学びや生活を通して、教員と子ども、子どもたち同士がお互いに相手の言葉をよく聴く、相手が理解しやすいようにわかりやすく説明しようするなど、対話を大切にすることで言葉を介した真摯な姿勢が身に付くのではないかと考えられ、今回の参加学生はそのエッセンスを3

回の鑑賞者ボランティアから学んでいるように思われる。

4. まとめ

学校現場では、対話を通して子ども同士をつなげる力が教員に求められている。今回の鑑賞会から、教員の実践的指導力として、授業や学級づくりの具体的な場面での「みる・考える・話す・聴く」の活動を重視した場の作り方を学生が経験できたことは、ACOPの大きな効果であるといえる。学生の感想にあるような、ACOPでの経験が学校での学びだけでなく、日常生活での他者との対話を豊かにするなど、人間関係を構築していく際の自らの姿勢や声掛けの方法として活かしていこうとする気づきは、担当教員のわたし自身は気づかなかった視点であり、学生に教えてもらった。

また、3名の学生は、今回の鑑賞会を運営しているアートプロデュース学科の学生の皆さんの、働きやおもてなしの姿勢に刺激を受けていた。今後、彼女たちがインターンや教育実習など実践に向き合ったときに、今回の経験をもとにどんな成果を残してくれるのか楽しみである。

現在、大学ではアクティブラーニングを導入した授業づくりが求められている。学生の学修成果の質保証をめざす上で、作品やほかの鑑賞者との豊かなコミュニケーションを通し、主体的な鑑賞者としてその観察力、批判的思考力が高められるACOPの取り組みから、学ぶことは多い。また、次期学習指導要領の改訂では、小学校から高校の教育課程でもアクティブラーニングが盛り込まれるとされている。大学の教員養成課程においても、アクティブラーニングのデザインとファシリテーションを教員の資質として学生に指導する必要がある。現職の教員研修では、喫緊の課題となるであろう。特に、子どもたちの対話を促進するための声かけのタイミングや発問の仕方など判断の一つひとつが鍵となってくる。

教育工学の分野に授業研究という領域があるが、たとえば、場面に応じた判断の引き出しを増やすため、子どもたちの授業の様子を撮影した画像や動画を複数の学生や教員でみて多様な解釈を語り合うなど、今回のACOPの経験を教職課程における教育方法の開発につなげたいと考えている。